

関口尚志先生追悼

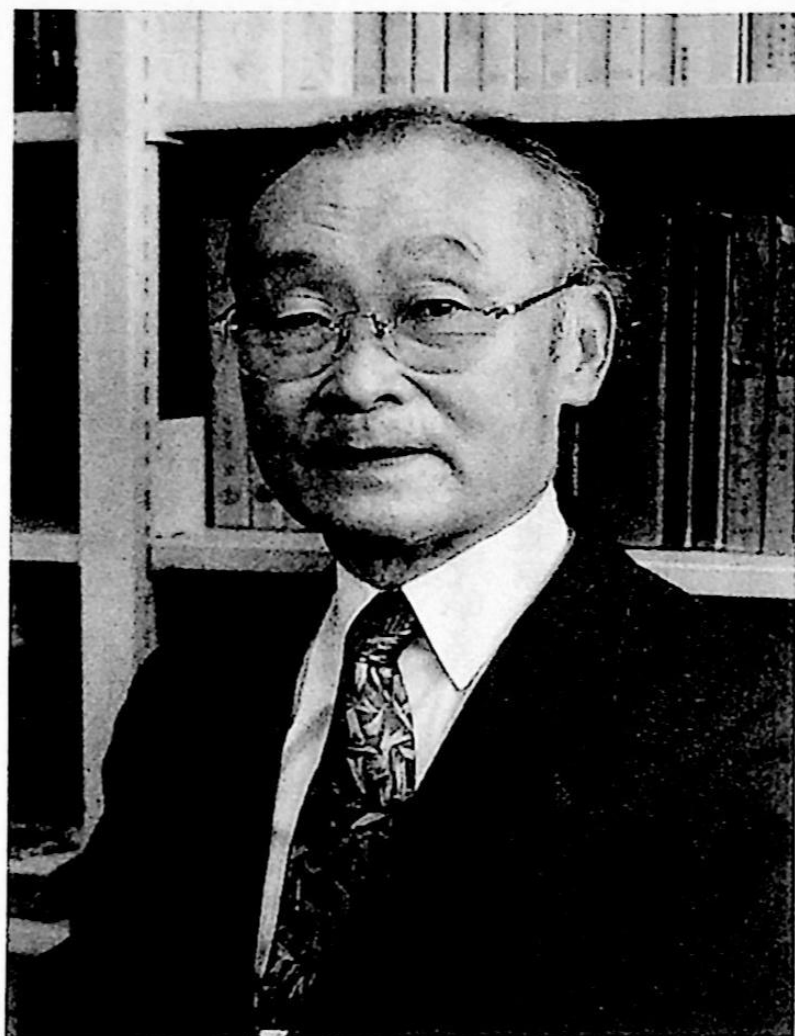
関口尚志先生の学問

小野塚 知 二

はじめに

二〇二二年二月一七日に八九歳で逝去された関口尚志先生は何よりも学問を大切にされ、学部演習の学生にも、大学院生にも、また研究会などに参加された他大学や他国の研究者にも等しくこの姿勢で臨まれた。本稿は、先生の半世紀以上に及ぶ学問の軌跡を振り返ることにする。

わたしがまだ学部演習の学生だった一九八〇年頃のことだと思うが、何かのうちに、先生は学部の卒論では近世イギリスの都市ヨーマンを扱ったことがある。一九五五年三月に東京大学経済学部を卒業された関口先生は、四月に同大学院に進学した。先生が院生時代から継続的に進めてきたのはイギリス経済史、なかんづく地方金融史に関する研究であった。そうした研究は大塚久雄が唱えた、「商人的問屋制前貸人としての問屋制商業資本家」（都市の織元）と「独立自営農民層を出自とする中産的生産者層」（農村の織元）との対抗・併存関係（「商人から生産者へ」と「生産者から商人へ」の二つの資本主義発展の道）のうち、都市―ただしロンドンのような超巨大都市以外の地方都市―的な出自を有する者も「近代的商業信用」の展開を担ったことを明らかにしようという基本的な問題



関口尚志先生、2004年
フェリス女学院大学の研究室にて

意識のうえになされていた。後述のように、イギリス地方金融史・中央銀行形成史研究以外の領域でも、関口先生は大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄らによって開拓された比較経済史学（いわゆる大塚史学）を普及し、発展させることをご自身の研究・教育上の最も大切な指針とされていた。

当時、関口先生は学部演習で比較経済史学の基礎的な概念とそれを用いた思考法とをわたしたちに体系的に教えてくださった。それこそ、耳にたこができるほど叩き込まれたため、それはわたしの学年やその前後の学生たちには必ずしも好評ではなかった。しかし、四十年以上経て、いまもそれがわたしの思考法の基軸となっていることは疑いようがない。経済史学からも経済学からも確固たる参照基軸が喪われてしまったいまから思い返すなら、先生の頑固ともいえるべきこの教育法はたいへん有効であったといわざるをえない。

イギリス地方金融史・中央銀行政策形成史
関口先生が公刊された最初の論文は、
「イギリス初期地方銀行の存在形態とその

基盤…名譽革命前後のイングランドにおける市場および信用の構造とロンドンの地位」(金融經濟研究所『金融經濟』第五五号、一九五九年四月)である。関口先生が二六〇二七歳で執筆された論文である。すでに、後のイングランド銀行バーミンガム支店に関する一連のご研究の萌芽が現れており、先生の一贯した関心がここにあったことを示している。以後、このテーマでは、「一七、八世紀イングランドにおける信用の構造と収税の機構」一・二を『史学雑誌』第六八卷(一九五九年)に、「金融制度の変革…イギリス市民革命における金融問題を中心として」を大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄編著『市民革命とその成果』(岩波書店・西洋經濟史講座「封建制から資本主義への移行」第四卷、一九六〇年九月)に発表されている。先生は一九六〇年三月末をもって東京大学大学院經濟学研究科博士課程を単位修得・退学して、四月には東京大学助手に採用されたから、この西洋經濟史講座に収録された論文が大学院時代の最後の研究成果であろう。

一九六二年には先生は經濟学部助教授を拝命し、多面的な活躍を始める。一九六三年度の土地制度史学会春季総合研究会「産業革命以前の「恐慌」について」で発表した「初期恐慌…マニユファクチャー期の過剰生産をめぐって」(『土地制度史学』第六卷第一号、一九六三年)は市民革命前後の恐慌史を論じたが、ここでは地方金融は簡単に触れるにとどまっている。一九六〇年代から七〇年代初頭にかけては、さらに、「イギリス「國民經濟」の形成と信用關係の展開」一〇三(東京大学『經濟学論集』第二九卷第一〇三号、一九六二年)、「イングランド銀行と重商主義…銀行創設の社会的推進主体」一〇三(『經濟学論集』第三二卷第二号、第三号、第三二卷第一号、一九六五―六六年)、「イギリス産業資本の確立と金融改革…その世界的インパクトを中心に」(大塚久雄ほか編『資本主義の形成と發展…山口和雄博士還暦記念論文集』東京大学出版会、一九六八年)、「イングランド銀行と産業革命」『社会經濟史学』

第三八卷第二号、一九七二年）など一連の論文を発表しただけでなく、小野朝男『イギリス信用体系史論』（東洋経済新報社、一九五九年）、J. Keith Horsfield, *British monetary experiments, 1650-1710* (London School of Economics and Political Science; G.Bell, 1960)、杉山忠平『イギリス信用思想史研究』（未来社、一九六三年）など、同時代のイギリス信用史研究の書評も発表している。こうして、関口先生はこの分野の若手研究者として学界に躍り出た。そこでの先生の姿勢は一貫して、一六九四年の創設以来のイングランド銀行の性格として、政府の銀行（政府向け短期貸し付けや長期国債引受など公信用制度を通じた歳入補填と引き換えに発券独占権を獲得）という側面よりも、むしろ、商業手形割引と他の金融機関向けの銀行業務（W・バジョットによって「最後の貸し手」として定式化された機能）を通じて近代的商業信用の連鎖を補完する側面を強調するものであった。それは、この分野の研究史上、決して多数派の説ではなかったし、実証的にも理論的にもさまざまな反論や批判を浴びたが、関口先生は大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄らによって開拓された比較経済史学の見地から、近代的商業信用の機能が論理的に先行し、それに付随する形で、一見守旧的な性格に見える「政府御用達の銀行」という機能も近代的に確立したのだとする独自の説を貫いたのである。

関口先生は一九七〇年代の滞英調査でイングランド銀行、なかんづくそのバーミンガム支店にかんする諸史料を収集した。それらを活かした研究成果が、「イングランド銀行バーミンガム支店」「地域」からみた中央銀行政策形成史」（『経済学論集』第四七巻第二号、一九八一年）であり、「イングランド銀行支店経営と中央銀行政策」「地域」からみた「中央」銀行政策形成史」一〇五（横浜国立大学『横浜経営研究』第一五〇一七巻、一九九四〇九六年）を経て、「19世紀前半イングランド本・支店間論争」「中央」銀行政策の形成と「地域」的経験」一〇二（『横浜

経営研究』第一八―一九卷、一九九八年）、「中央銀行政策形成史の一断章…イングランド銀行バーミンガム支店長の視点」（『横浜経営研究』第一九卷、一九九八年）にまで及ぶ。これらにも地域経済の商業信用にはたしたイングランド銀行の機能に着目する観点は貫かれている。しかも、そこでは、「中央」が先に存在して、その周辺として「地方」が規定されるという論理は採用されず、むしろ、自律的な「地域」経済との関係においてこそ「中央」銀行のあり方は規定されたのだとの論理が前面に押し出されていることが印象的である。「中央と地方」の二項図式ではなく、「地域」あつての「中央」という基軸のうえに、地域と中央との齟齬や摩擦の側面をも描き出すというのが、これら諸論文の最大の特徴である。

関口尚志先生には、これら一連の論文を一書にまとめうる機会は何回かあつたが、さまざまな事情からそれは実現していない。二〇一〇年一月に開催された東大経済学部関口ゼミ同窓会（尚史会）に合わせて刊行しようという具体的計画もあつたのだが、先生は、「締め切りがないという特権を享受」するとの理由で、この最後の機会も失われてしまった。いま改めて諸論文を読み直すと、それらが先生自身の手でまとめられなかったことはたいへん残念に感じられる。

ナチズムと日本型ファシズムへの関心

一九六〇年代の関口先生は、こうしてイギリス地方金融史の研究を展開する一方で、ナチズムへの関心を深めていた。まず手始めに、塚本健「ナチス経済…成立の歴史と論理」（東京大学出版会、一九六四年）の書評を『経済学論集』第三〇巻第四号、一九六五年に発表された。そこで、先生は同書が純粹に経済学的方法を駆使して、ナチス経

済の成立を、相対的安定期（一九二〇年代）の資本蓄積機構が世界恐慌を経てナチス期の資本蓄積機構へといかに変容したのかに注目して解明したことを評価しながらも、他面では、そこにナチズムの人的基礎への関心が希薄であることへの不満も表明した。

ナチズムの人的基礎を明らかにすることが比較経済史学の現代史への応用の最良の事例研究となるであろうことを先生は確信していた。右の書評を発表した三年後には、「ドイツ革命とファシズム…戦後日本資本主義の問題的狀況を展望して」（『経済学論集』第三四卷第二号、一九六八年）と題する長大な論文を発表した。さらに、同年に「ドイツ革命の根本問題」（川島武宣ほか編『国民経済の諸類型』岩波書店）、一九七二年には「ヴァイマルⅡナチス期の地域開発構想…比較史的覚え書き」（大野英二・住谷一彦・諸田實編『ドイツ資本主義の史的構造』有斐閣）を発表された。そこで関口先生は、一九一八年以降のドイツ革命によってドイツ帝国の半封建制的な要素（貴族世襲財産、ユンカーによる領地管区支配、僕婢条例・団結禁止令、三級選挙制度、縁故官僚制等々）が一掃・廃止されたとはいえ、ヴァイマル期が達成した民主主義的な諸成果がナチズムが唱えた「指導者原理（Führerprinzip）」の前に崩壊してしまった原因は、自立した主体性を有する近代人を十分に形成しえなかったドイツ帝国期以来の長期的弱点が作用していたとの説を、非常に精緻な分析を踏まえて、一文字の無駄もなく書かれた。

これら一連の研究は、「民衆」がいかにして「指導者原理」を必要とし、それゆえナチス独裁体制が導かれたかをドイツの近代化のあり方と主体形成の特質から解明する画期的な研究となった。それらは、近代化と現代資本主義の歴史的関連を問う関口先生独自の視点が強く打ち出された研究であると同時に、わが国の西洋現代経済史研究の嚆矢ともなり、とくに若手研究者に多大の影響をあたえ、その後のヴァイマル期・ナチス期研究を進展させる基礎を築

くものであった。

これらナチズムをめぐる研究は、比較経済史学の知見と方法を用いて現代史上の問題を解明しようとする試みであるが、「ドイツ革命とファシズム…戦後日本資本主義の問題的状況を展望して」の副題にもあるように、反封建制的要素を戦後改革で廃絶した日本にも、同様の危機が当てはまる可能性があることを示唆していた。先生は、さらに、この論点を戦前期日本に遡及することを試みた。それが、「危機の意識と日本型ファシズムの経済思想…北一輝と権藤成卿」（長幸男・住谷一彦編『近代日本経済思想史2』有斐閣、一九七一年）で、七〇頁に及ぶ長大な論文である。幕末維新期以降の日本の近代化過程の歪みに規定されて登場した北一輝と権藤成卿ごんどうせいぎょうの独特な危機意識・現状批判と現状打破戦略の形成過程を明らかにし、併せて、それらが農村困窮を通じて革新派青年将校へと共有されるにいたったさまを論じた。

比較経済史学は大塚・高橋・松田ら第一世代からすでに、各国の封建制から資本主義への移行過程を国別の構造として解明するという分業体制を築いていたが、関口先生らの第二世代にも、国別に構造を叙述し、講座派風になら「型制」を把握するという分業関係は確実に継承されていた。関口先生がその中では近世・近代イギリス経済史を担当するという役割は比較経済史学派の内外で広く認知されていたが、先生の豊かな着想と類い希な言語能力はそうした役割のみに甘んずることを自身に許さなかった。一九六〇～七〇年代の日本にあつて、なぜナチズムや日本型ファシズムが生成したのかという現代的な問いを立て、それにとりあえずの解を描いてみせるという課題を自らに課した結果現れたのが、これら一連の研究成果である。関口先生は比較経済史学派の国別分業関係のみに安住していなかったし、また、封建制から資本主義への移行という基本テーマが直接的に求める時期の研究のみに踟躇することな

く、現代史研究への道を先駆者的に歩いたのである。しかも、それは単なる関口先生個人の思いつきではなく、比較経済史学が蓄積してきた知見と方法を踏まえた重厚な現代史の開拓でもあった。

問題提起的な三つの書物とその他の研究

関口尚志先生は一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、三つの問題提起的な書物の刊行に関わられた。

石井寛治・関口尚志編『世界市場と幕末開港』（東京大学出版会、一九八二年）は、東京大学産業経済研究所コンファレンスの記録であり、関口先生は、最初の「問題提起…開港の世界経済史」を担当された。そこで、先生は、幕末開港を日本側史料に依拠して日本内部の政治的・経済的状况のみから描くのではなく、「世界史的視点」を導入することが必要であると指摘し、また、併せて従来の政治・外交史や経済史的視点だけでなく、「地域（＝民衆）史的視点」の重要性を提唱された。多彩な報告者（毛利健三、楠井敏朗、権上康男ごんじょう、加藤祐三、石井寛治、芝原拓自）と討論者に恵まれて、本書は大きな話題の的となった。数多くの好意的な書評とともに、さまざまな批判や提案も受けた。そうした反応も含めて本書の登場は幕末開港史研究のあり方を大きく変える画期となった。

関口尚志・梅津順一『欧米経済史』（放送大学教育振興会、一九八七年、改訂版一九九一年、三訂版『欧米経済史…近代化と現代』一九九五年）は、放送大学で開講された「欧米経済史」の教科書である。前近代から現代までの欧米経済史を限られた紙数で叙述するという離れ業を可能にしたのは、共著者二人が比較経済史学の枠組を活用して、複雑多様な過去を単純化して描く技を駆使しえたからである。三訂版で付された副題「近代化と現代」はそのことをよく表現している。また、現代資本主義をニューデール型とファシズム型という二つの理念型に整理して、第二次世

界大戦後の西側諸国の高度経済成長まで展望できるようになっているが、その着想が関口先生の「ドイツ革命とファシズム」など一連の現代史研究に発していることはいうまでもない。

関口尚志・梅津順一・道重一郎編著『中産層文化と近代…ダニエル・デフォーの世界から』（日本経済評論社、一九九九年）は、大塚久雄がたびたび引用・言及したデフォーに注目して、中産層が近代社会の牽引者の役割を果たしたことを論じようとする共同研究の成果である。中産層文化の地域的起源、ジェントリーの「怠惰・浪費」と中産層の「勤労・節約」の対比、中産層女性の自立的主体性、中産層のアソシエーションの文化など緒論点を扱うことで、大塚史学の生命力を再確認しようとした。すなわち、「資本主義の精神」と、中産層の牽引力と、健全な資本主義の指示器としてのデフォー・ロビンソン像とが本書の各所で強調されているのである。ただ、「ロビンソン・クルーソー」によって描き出されるのが、必ずしも大塚が意図したような「健全な近代人」ではなく、むしろ「過剰蓄積、過剰防衛、植民地主義的性格などで特徴付けられる」（病的な現代人）である可能性について（大塚久雄著・小野塚知二編『共同体の基礎理論 他六篇』岩波文庫、二〇二一年、編者解説三七〇頁）、すでに岩尾龍太郎『ロビンソンの砦』（青土社、一九九四年）が余すところなく論じ、また同氏も招いて開催された土地制度史学会（現在の政治経済学・経済史学会）一九九七年春季総合研究会「経済史における人間像―大塚史学の方法をめぐって―」でも論じられていたことを、本書がまったく無視していることについては、疑問が提示されてこなかったわけではない。大塚の没後に、大塚史学を守ろうとする姿勢がやや過剰に表れているのである。

このほかに、関口先生は一九六〇年代から二〇〇〇年代にかけて、主なものだけでも以下のように極めて多彩な仕事をなさってきた。題目からおよその中身は推察できるだろう。

書評・J・D・チェンバーズ（宮崎犀一・米川伸一訳）『世界の工場…イギリス経済史一八二〇～一八八〇』岩波書店、一九六六年（『社会経済史学』第三三卷第二号一九六七年）。

「歴史的背景と国際比較…土地改革と地域開発」（佐伯尚美・小宮隆太郎編『日本の土地問題』東京大学出版会、一九七二年）。

「低開発（＝植民地）型金融構造の基本性格」（大塚久雄編『後進資本主義の展開過程』アジア経済研究所、一九七三年）。

「近代化の諸問題」（社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、一九七六年）

書評・松尾太郎「先資本主義的生産様式論」論創社、一九七八年（社会経済史学第四四卷第三号、一九七八年）。

書評・奥田央「ソヴェト経済政策史…市場と営業」東京大学出版会、一九七九年（『日本経済研究センター会報』第三五五号、一九七九年）。

書評論文「工業化と経済史…ヒューズ著・角山栄ほか訳『世界経済史』（『社会経済史学』第四五卷第六号、一九八〇年）。

書評・岸田理「ウォルター・バジヨットの研究…経済思想および経済理論を中心として」ミネルヴァ書房、一九七九年（『経済学論集』第四六卷第三号、一九八〇年）。

関口尚志・朱紹文・植草益編『中国の経済体制改革…その成果と課題』東京大学出版会、一九九二年。

「大塚久雄先生を偲ぶ（追悼文）」『社会経済史学』第六二卷第四号、一九九六年。

「イギリス市民社会の歴史的特質」『聖学院大学総合研究所紀要』第二三三号、二〇〇一年。

関口尚志「大塚久雄の人と学問…福島大学附属図書館大塚久雄文庫開設記念講演会」福島大学附属図書館、二〇〇三年。

むすびにかえて

関口尚志先生は、殊に一九八〇年代以降、学内行政においては、経済学部長、評議員、入試制度委員会委員長、総長特別補佐（現在の副学長に相当）などの激職に当たられて、東京大学の発展に多大な貢献をなした。また、社会経済史学会理事・常任理事および代表理事、日本経済学会連合理事などを歴任して、わが国の経済学、経済史学の学会活動において重要な役割を果たしてきた。それ以外にも、大学基準協会理事・常務理事、大学設置・学校法人審議会委員・常任委員、日本学術会議会員、学術振興野村基金評議員、野村財団理事などを務めた。

わたしの大学院時代から助手時代に、関口先生はこうしたさまざまなお役目——研究そのものではないが、研究できる環境を維持し改善するための学内行政や学会等の用務——を、厭な顔一つ見せずに引き受けられ、きわめて真摯な態度でそれぞれの役に臨まれた。それでいて、わたしが草稿を持って行けば、必ず読んで、適切な助言と感想をくださったし、推薦状も書いてくださった。

そうしたもろもろのことが、先生の貴重な、残された研究時間を蚕食していたのであった。わたしは先生から抜き刷りや本を頂戴すると、嬉しくなって読むことは読むのだったが、いつもお礼状を書くのは忘れていた。今世紀に入って、わたくしの方から送る抜き刷りや本の方が多くなると、先生はいつも、心の籠もったお葉書をくださった。

関口尚志先生がそういう風にして、常に学問を——自分の研究だけでなく、他者の研究をも——大切にされてい

たということに気付いたのは、そうしたお葉書もいだけなくなつてからであつた。わたしが大学院へ入学する少し前の学部演習のコンパの後、本郷三丁目の駅で、ほろ酔いの先生から、「君も茨の道を選んだね」と言われ、「え？」大学院って茨の道なんですか？」という頓珍漢な受け答えをしたわたしは、そのときは、研究が茨の道なのだと理解したが、いまになつて思うと、研究したいのに、そのための時間と氣力と体力とをさまざまな些事に消費され、研究もままならないのに、それでも学問の世界で真つ当に生きることは、結構たいへんなことなんだということを先生はおっしゃりたかつたのではないだろうか。

いまとなつてはそれを確かめる術もない。先生から賜つた文字通り学恩に報いようにも、わたし自身が、先生の経歴というなら、三度目の職場となつたフェリス女学院大学に着任された年齢に達してしまつた。わたしは相変わらず要領が悪く、生産性も低いまま、氣力と体力は着実に衰えつつある。氣が付けば、先生の歩んだ足跡の消えかかつた道を、わたしは四半世紀ほど遅れて辿っている。わたしにとって残された時間で、先生にご報告できることをどれだけ紡ぎ出せるか頑張ってみますとしか、先生の前では言えない。

（昭和五十六年経済学科卒、東京大学特命教授／東京大学名誉教授、放送大学客員教授、尚史会会長）